2019年 学習の行き先 英語多読をはじめてみる

「多読」というのは、文字通り「多く読む」という意味です。英語の本を多く読むには時間がかかると思われるかもしれませんが、しかし、単語を書いて覚えたり、難しい問題集に向かって勉強したりするよりも、**多読のほうに自然に、早く、言葉を身につけることができますと**言われています。

とにかく何でもいいから、英語をたくさん読むのだ、と考えると、なんだか気が重いですね。大きな書店の洋書コーナーには、分厚い本がたくさん並んでいます。意を決して手に取り、開いてみると、英文がびっしり…。「この単語はどういう意味だろう…」「これが主語だから…」なんて考えてしまうと、1ページ読むのに、どれだけ時間がかかることでしょうか。とても続きそうもありません。

本をたくさん読むためには、楽しむことが大切です。いきなり難しいものから始めるのではなく、絵本のように、文字が少なく、ストーリーがわかりやすそうなものから始めてみるのがいいでしょう。絵があれば、理解の助けにもなります。絵本なんて、とバカにせず、自分の英語のレベルを考えて、まず手に取ってみましょう。ほとんど文字がない絵本から、少し文字が多い絵本、文字が多く絵がほとんどない物語、と少しずつレベルアップしていけばいいのです。無理をせず続けていけば、分厚いペーパーバックがきっと読めるようになります。

英語の本をたくさん読むためのコツをいくつかご紹介しましょう。

まず、**和訳を考えたり、辞書を頼ったりしないこと。**

Once upon a time, 「むかしむかし」、on a hot summer day, 「ある暑い夏の日」、a grasshopper was singing. 「キリギリスが歌っていました」というふうについつい少しずつ、あるいは文を全部、日本語に置き換えようとしがちです。これでは、知らない単語が出てきたとたんに、詰まってしまいます。それをひとつひとつ辞書で調べると、読む作業がそこで止まってしまいますね。知らない言葉は、日本語にもあるのですか

ら、英語にもたくさんあってあたりまえだと割り切って、気にせず読み進めていきましょう。「grasshopper ってなんだろう？」と思ったとしても、なんとなくイメージしながら読み進めていけばよいのです。**日本語には置き換えられなくても、英語のまま理解し、イメージできる単語がいつの間にか増えていきます。**

次に、意味がよくわからないところでいつまでも止まっていないこと。日本語の本を読んでも、何を言っているのかがよくわからないところはありますね。同じように、英語の本でも、知らない単語がたくさん続いて、**何を言っているのかわからなくなったら、思い切ってそこは飛ばしてしまう**のです。何度も読んで理解することに時間を使わず、どんどん進めていきましょう。

最後に、どうしても楽しくなければ、その本は読むのをやめてしまいましょう。単語の意味を気にせず、よくわからないところを飛ばして読み進めてはみたものの、興味を持たない話、自分が楽しいと思えない話を無理に最後まで読む必要はありません。**おもしろくないな、と思ったら、別の本を読み始めましょう。**改めて辞書を持ってきて単語を調べ直す時間ももったいない。興味を持って読める本は、他にいくらでもあるはずです。すぐにやめられるように、図書館を有効に利用するのもひとつの手段です。

英字新聞を読んでもみるのも、簡単に多読できる方法のひとつです。新聞記事だと、世の中の動きや、スポーツなど、知っていることが英語になっているので、読みやすいでしょう。無料のものや、月ごとの料金が決められているものなど、いくつもありますから、【英字新聞 中学生】などのキーワードで検索して、自分に合ったものを見つけてみてください。

学林舎では、英語学習＝言葉としての英語を身につけるために、アメリカの小学校で利用されている All English 教材やレベル別に 800～2,000 冊が多読できる「Raz-kids」などのデジタル教材を推奨しています。「Raz-kids」は、無料トライアルなどができますので、一度、お試し下さい。

2019年 教育の行き先 学校に行く理由に悩む子供たちへ

文科省の調査によると、2017年度の小・中学校における不登校児童生徒数は、14万4031人(前年度比1万348人増)で、過去最多となりました。児童生徒数は少子化により減少し続けていますので、不登校児童生徒数の割合が大きくなっていることがわかります。

特に不登校児童生徒数が増えるのが、長期休暇明けの新学期の時期です。不登校の子供たちからは、さまざまな声が聞かれます。その1つに、「学校に行く理由や意味がわからない」という声があります。私たち大人も、小学校や中学校が義務教育だからということもあり、明確に答えを提示するのは容易ではありません。では、学校は、いつどのようにしてできたのでしょうか。

今日のような「学校」が始まったのは、江戸時代のころだと考えられます。藩ごとに、武士の子供が一度に集まってさまざまな知識を学ぶ「藩校」ができ、町や農村でも読み、書き、そろばんなどを学ぶ「寺子屋」ができました。これが「多くの子供が1つの場所に集まって学ぶ」という現在の学校の形態の始まりでした。その後、明治時代になると、教育の近代化が進み、小学校教育が義務化され、より幅広い知識を多くの子供に同時に伝えるという集団的な教育の傾向が強くなりました。さらに大正・昭和時代になり、国際情勢が緊迫化するのに伴い、小・中学校では学問的な知識を学んだりするだけでなく、戦争への心がまえや戦闘の訓練などを行ったようになります。このようにして、「学校」は次第に知識を身につけるだけの場所から、子供たちの思考や生活態度にも影響をあたえる場所になりました。

戦後になり、軍事主義的な教育は一変しました。しかし、日本が敗戦からいち早く復興するために、学校で子供たちに画一的な思考や行動を身につけさせようという傾向は変わりませんでした。結果、日本の1950年代半ばから1970年代はじめの急激な高度経済成長に、このような教育が大きく寄与したといえます。

このような状況のなかで、子供たちは、いかに「集団から外れないか」「集団のなかで一番になれるか」を考えるようになります。そこで生まれるのが、「いじめ」や「仲間外れ」、最近では「*スクールカースト」といった問題です。このようなことが原因で、多くの子供たちが「学校に行きたくない」と悩んでいます。また、その問題解決のために、学校が保護者以上に責任を求められるようなケースが多くなり、先生の負担が大きくなっています。一方で、学校以外の学ぶ場である「塾」の増加により、「勉強は学校以外でもできる、わずらわしいことがある学校なんて行かなくてもよい」、「学校に行く意味がわからない」と言う子供たちもいます。

学校は知識を身につける以外にもさまざまな役割をもっています。そして、学ぶ場所は、学校以外にもたくさんあります。ですので、よりいっそう子供たちは「学校に行く理由や意味がわからない」と悩むのではないのでしょうか。大人でも悩む問題ですので、子供たちと理由や意味を話し合うのも1つの対応ではないでしょうか。その結果、「学校に行く理由がわからないので、行かない」と結論を出したときは、私たち大人が見守ることも、大事なことだと考えます。

(文 / 学林舎編集部)

*スクールカーストとは、学校社会において、生徒間の序列を、カースト制度(身分制度)になぞらえた表現。アメリカの学校で発生した現象が日本でも発生しているのではないかということから、SNS上で「スクールカースト」という名称が定着しました。

クロスロード Crossroad

第97回 文/吉田 良治

アスリート活動の健全な環境

9月に入っても猛暑日が続きましたが、徐々に秋らしい気候になってきました。来年は東京五輪・パラリンピックが開催されますが、高温に加え湿度も高い日本の夏にスポーツをすることは命の危険があります。先日のマラソン日本代表を決めるマラソングランドチャンピオンシップ・MGC を見ていると、真夏の日本でマラソンを実施することは、尋常ではないと感じます。最高気温が40度を超える日も珍しくなくなっていますので、根性で何とかなる問題ではなくなっています。とはいえ、IOCで夏のオリンピックの開催時期(7月15日～8月31日の間)が決まっているので、この条件で開催することになります。エアコンの効いた室内競技は別として、野外競技は日中の実施を避け、夜間や早朝に開催することが必要になります。アスリートだけでなく観戦者の健康にも配慮した運営が求められます。

日本では根性を求める体質が根深くあります。それが最もよくわかる事例は体罰やパワハラ指導、上意下達の体育会系から見えてきます。2012年に発生した大阪の高校の部活顧問による体罰自殺事件以降、体罰指導に改善が求められてきましたが、まだまだ改善途上といえます。これはスポーツ界だけの問題ではなく、家庭での躰のための児童虐待、学校での生活指導、職場でのパワハラなどブラック問題が一般社会生活にも影響しています。スポーツ界がまずスポーツマンシップを大事にし、健全なスポーツ運営を実践し、それを社会へ模範として共有することが重要です。

スポーツ界の健全化については国が昨年から“スポーツインテグリティの確保”を掲げ、具体的に取り組みが始まりました。学校部活の改善については、東京都教育委員会が都内の公立中高校を対象に、長時間部活

を無くし、学業との両立を目指し、人間力を育むことを目的にした方針を作成しました。スポーツ偏重は体罰やパワハラ体質と根っこでつながっていきます。スポーツ以外の時間を如何にして確保するのか、国や教育委員会がリーダーシップを発揮して、具体的な方針を示し実行していくことが重要です。

ここで一つ気になることは、指導者だけでなくスポーツに前のめりになる親の存在です。スポーツをする子供が上達する・強くなるためには体罰やパワハラ指導、長時間練習を支持する親も少なくありません。スポーツに限らず楽しく取り組めることが上達のカギです。子どもが苦しむ姿に上達のカギはありません。平昌オリンピックで最も多くのメダルを獲得したノルウェーでは、小学生卒業年代まではスポーツで楽しむことを重視しています。勝ち負けや得点の優劣などを意識せず、良好な人間関係や友情を重視しています。スポーツの真の価値はそこにあります。ノルウェーのように国が正しい方向性を持ち、現場の指導者や親がその方向性を尊重したスポーツ運営をする、そこに真のスポーツの強さが芽生えてきます。

厚生労働省の調査によると未成年の自殺の要因として、小学生で最も多いのは家庭問題(躰・親子関係の不和など)です。子どもを正しく導くために、親がすべきことは体罰で子どもに恐怖を与えコントロールするのではなく、子どもが自分の意思で考え、自信を持って行動できるような環境を整えるべきです。本来スポーツにはその環境が整っています。親と指導者とそのスポーツの真の価値に気づき、ともに楽しく取り組めるようになると、家庭の躰、そしてスポーツ指導の現場から体罰やパワハラはなくなっていくと思います。(つづく)

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。
全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog <http://ameblo.jp/outside-the-box/>